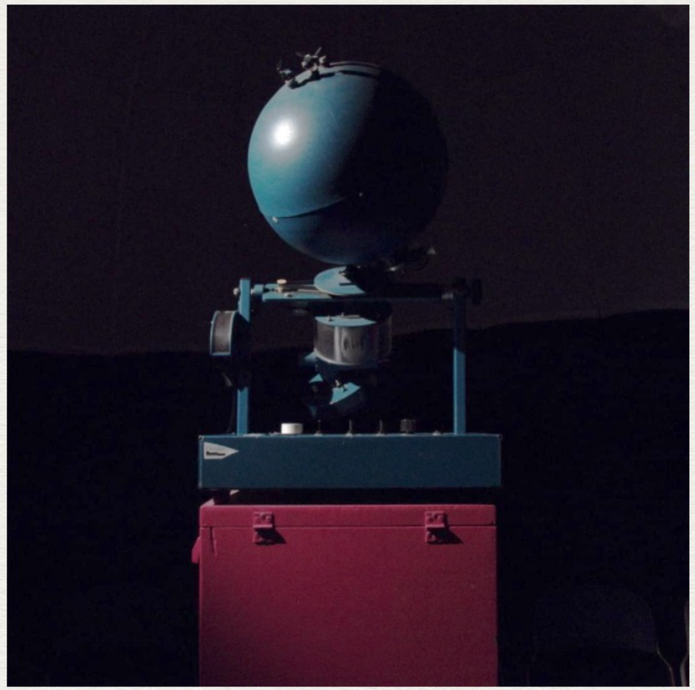
さわ ひらき

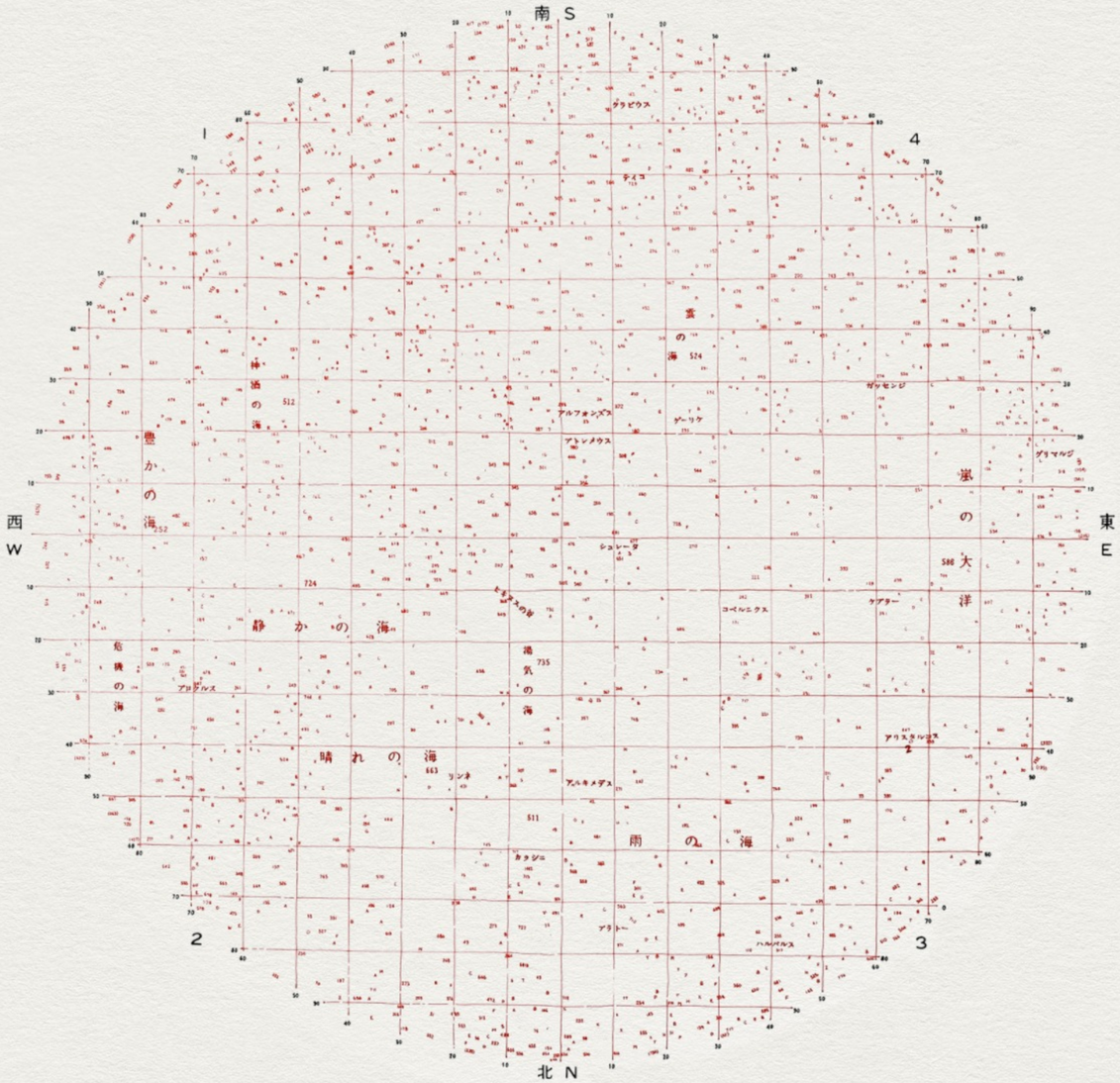


Polaris

2021、ビデオ（14分40秒）

© Sawa Hiraki

＊字幕はコントロールバーでON/OFFが可能です


南 S
北 N
西 W
東 E
1
2
3
4
グラビウス
ティコ
雲の海 524
ガッセンディ
アルフォンスス
ゲーリケ
アレメドラス
グリマルディ
林檎の海 512
豊かの海 252
シュレーター
嵐の大洋 586
ケプラー
コペルニクス
724
静かの海
危機の海
アポロニウス
湿気の海 735
アリスタルコス
晴れの海 663
リンネ
アルキメデス
511
雨の海
カタシニ
アラゴー
ハルディウス

CURATOR’S NOTE

徒歩1時間の距離は遠いか、近いか。そう問われた時の答えには、歩いた先にあるなにかとの関係性が反映されるのではないだろうか。

スコットランドのダンディー市に建つイギリス最古の公共天文台、ミルズ天文台に勤めるロバート・ロウにとって、何光年の彼方にある星との距離は、隣の人とのそれより近いのかもしれない。専門教育を受けたわけではない、独学の天文愛好家であるロウは、巡り合わせでミルズ天文台に職を得て、古式ゆかしい機材を操りながら、訪れる人々に愛してやまない天体の物語を語る。

さわは2013年にロウと出会い、宇宙、光、レンズといったものに強く執着する彼の存在に惹かれて、その日々の営みを撮影することにした。さわのこれまでの作品は、室内を無数の模型飛行機が飛び交い、やかんや木馬がひとりでに動き出すといった、現実にはありえない、しかし記憶や意識の奥底で人がたしかに持ちうる世界を視覚化した映像で知られる。二人は一見交わらないように見えながら、多次元空間の考えにもとづく空間と時間への意識を共有する同志といえよう。空の彼方であれ、人の意識の中であれ、実際の距離や時間、現実・非現実の境界に対する思い込みにとらわれることなく、私的で居心地のよい領域を創り出している彼らは、ここととあちらの間は自分次第で自由に行き来可能であることを、私たちに示してくれているのではないか。
（N.S.）

CREDITS

制作

さわひらき

声・出演

ロバート・ロウ

サウンド

田村文岳

オーディオ・マスタリング

木村健太郎

字幕翻訳

さわひらき

謝辞

ロバート・ロウ

グラハム・ドムケ

メトード・ブレジェク

中島吏英

ミルズ天文台・ダンディー

PROFILE

さわ ひらき（さわ・ひらき）

1977年、石川県生まれ。ロンドンおよび石川県を拠点に活動。
心象風景や記憶といったひとりひとりが持つ領域（テリトリー）を問う、映像作品を制作する。近年は映像を主軸に、立体、平面作品を交えたインスタレーションを手掛け、物理的な空間と意識の中の領域を交差させる試みが人間の意識の奥底をたずねる体験をうながす。
主な展覧会に、「ふたつのまどか」（DIC川村記念美術館、千葉、2020）、「潜像の語り手」（個展／神奈川芸術劇場、神奈川、2018）、「Reborn Art Festival」（宮城）「札幌国際芸術祭」（北海道）「奥能登国際芸術祭」（石川）（すべて2017）、「Under the Box, Beyond the Bounds」（個展／東京オペラシティアートギャラリー、東京、2014）、第17回シドニービエンナーレ（シドニー、2010）など。

OTA FINE ARTS　James Cohan　Instagram

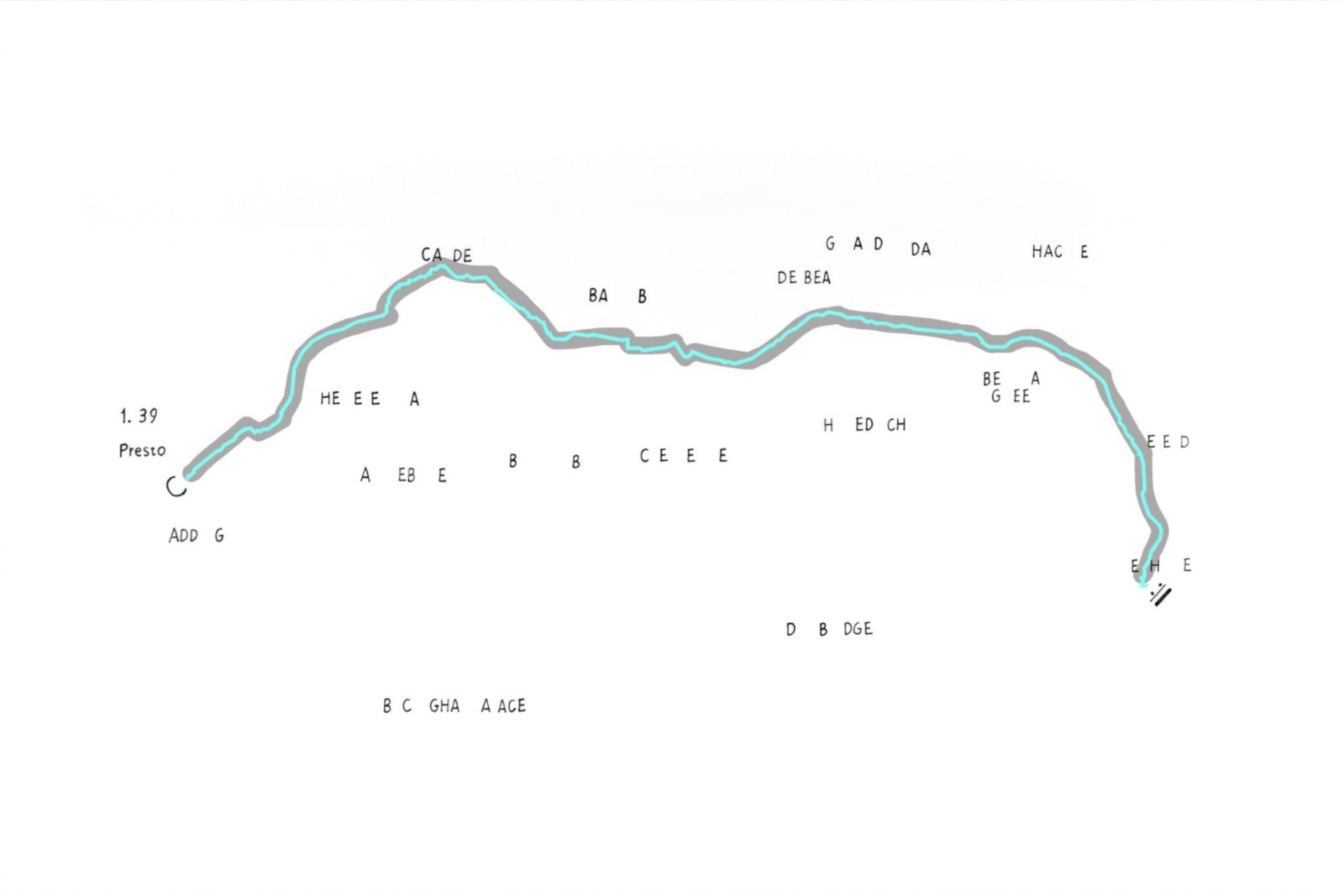
柳井 信乃

これはリージェンツ運河です
これはリージェンツ運河ではありません

これは楽譜です
これは楽譜ではありません

これは走る音です
これは走る音ではありません

これはあなたの夢です
これはあなたの夢ではありません



2021、バイノーラルサウンド（1時間41分35秒）

© Shino Yanai

*ヘッドフォンでの鑑賞をお願いいたします

CURATOR’S NOTE

作家である柳井自身が、ロンドンのリージェンツ運河沿い、西のリトル・ヴェニスから東のライムハウスまでの、およそ15キロメートルの距離をランニングした時間が、作品の長さである。作品のタイトルは、J・G・バラードの小説『The Day of Creation（邦題：奇跡の大河）』にちなんでいる。バラードの小説において主人公はサハラ砂漠に突如出現した河川の水源を目指すように、柳井は産業革命期に作られた運河沿いを走りながらテムズ川との合流地点へ向かう。

タイトルの末尾に付された4/4は、作品の冒頭と最後に聞こえるメトロノームの拍子である。この拍子にできるだけ合わせた、ミニマル・ミュージックを彷彿とさせる息遣いの反復がこの作品の基調音となる。そこに英語やその他の言語による人々の会話の断片や、動物の鳴き声、あるいは鉄道か水門などを思わせるローファイな工業音が、カナル沿いの特定の場所の性格を示唆する音として重ね合わされる。断片的でまとまりを欠いた雑音は、本来、音楽において、あるいは都市において排除されるべき存在である。また日常において、わたしたちがあまり傾聴することのない音でもある。そうした雑音が柳井の息遣いを背景に前傾化するが、それらは心地よい調和を作り出すことはない。あくまで雑音として不意に聞こえては過ぎ去っていく。このようにして生まれた軋轢の集積のような音楽は、さまざまな矛盾や葛藤を歴史的に抱えてきたロンドンという場所を駆け抜ける臨場感をもたらしてくれる。（M.T.）

CREDITS

謝辞

ランニングインストラクター

SHIDAMI Yasunobu

PROFILE

PROFILE

柳井 信乃（やない・しの）

1979年、奈良県生まれ、現在、ロンドンを拠点に活動。柳井は美的なものに潜む残虐性や、社会的にあるいは歴史的に覆い隠された暴力をフィールドワークによって捉え、その複雑な諸相をパフォーマンスや、主に映像や音などを用いたインスタレーションで表現してきた。最近では道と痕跡に関心を持ち、《Blue Passages》（2016）では、ヴァルター・ベンヤミンがナチスから逃れるために進んだとされるピレネー山脈の小道を辿るパフォーマンスを行い、またそれを記録した映像作品も制作している。
近年の主な個展に、「The Deep End」（佐賀町アーカイブ、東京、2019）、「Blue Passages」（White Conduit Projects、ロンドン、2016）。グループ展に、「de-sport: 芸術によるスポーツの解体と再構築」（金沢21世紀美術館、石川、2020）、「コロナ禍における文化芸術」（ゲーテ・インスティトゥート東京、東京、2020）、「夢か、現か、幻か」（国立国際美術館、大阪、2013）など。

Website

吉田 真也

ラフカディオ・ハーン　－海界（うなさか）の風景－

2021年、ビデオ（20分59秒）

© Yoshida Shinya

CURATOR’S NOTE

19世紀半ばにギリシア（当時は英国の保護国）で生まれ、ヨーロッパやアメリカ、西インド諸島などを旅した後に、明治の日本へやってきた文学者がいた。ラフカディオ・ハーン、後に日本国籍を取得して小泉八雲と名乗ったこの文学者は、各地で女性たちによって語り継がれてきた伝説や怪異譚に魅せられて、70編もの再話文学を著したことで知られる。

吉田真也は、ラフカディオ・ハーンの漂泊の人生と、彼の語り部であり人生における重要な人物でもあった母ローザと妻セツという二人の女性に注目して、彼が日本で記した紀行文「夏の日の夢」を起点に、ハーンの目になり代わって、日本での彼の足跡を辿る。島根、熊本、長崎、いずれも入り組んだ海岸線と島々に囲まれた海辺の風景は、ハーンが出会った語り部としての女性たちと、海にまつわる異界の伝説とを想起させる。眼前の風景は記憶と連想の言葉を紡ぎだし、ハーンの幼少期のおぼろげな記憶と重なり合う。現代を生きる吉田は、世界中を転々としただけでなく、異界や古の時代をも行き来するハーンの世界主義的な姿勢に自身の感覚との共通項を見出すように言葉を重ね、多声的な物語を描き出す。（K.E.）

CREDITS

監督
吉田真也

声
スティーヴ・マックルーア、ブラコ・ムリー

出演
中村千恵子、ヘリンガー・カティ

ロケーション協力
小泉八雲記念館、浦島屋

翻訳
メディア・トランスレーション・センター

録音協力
サクシード、岡千穂

特別協力
小泉凡

PROFILE

吉田 真也（よしだ・しんや）

1994年、青森県生まれ、島根県を拠点に活動。
絵画のように完成された構図による複数の風景映像をクロスカットで繋ぎ、歴史的な事件や、ある人物の個人的記憶といった事実と、作家自身の言葉とが交錯するオーラルな語りと共に、風景の背後に潜む土地の複層的な記憶を呼び覚ますような映像作品やマルチチャンネルの映像インスタレーションを制作する。
主な作品発表に、「MEDIA PRACTICE 20-21」（東京藝術大学横浜校地、神奈川、2021）、「札幌国際芸術祭」（展覧会中止に伴いオンライン・プロジェクトへの参加、2020）など。

Tumblr

← →